

令和 6 年度 広報委員会 活動報告

■委員名	委員長：松下清美 副委員長：三崎修子 委員：井手口翔子・稲垣智也・小川かおり・田中雄大・山口匡拓																								
■開催回数	7 回																								
■活動目標	1. 広報委員会と協会事務局に設置する「広報会議」との連携協働により、SNS を活用した効果的な広報活動を進めていく。 2. 会員・看護職向け、県民向け（中高校生含む）に適時適切な情報を提供するとともに、会員等からの意見を聴取し、協会活動に活かしていく。 3. 看護ひょうごの企画において、広報委員会が発信するページをつくり、会員目線で会員のニーズにあった情報発信を行う。 4. 新入会員研修を開催し、会員増のための広報活動を充実する。																								
■活動内容	1. 広報会議と連携協働し、会員向けの「看護ひょうご」の発行や LINE による情報提供など、看護協会活動への理解が深まるよう適時適切に情報提供し、会員確保、会員サービスの一層の向上、組織力の強化を図った。 1) LINE の活用推進、ホームページ充実を提案し、広報会議と協力して取り組んだ。 2) 「看護ひょうご」に広報委員会発信ページを企画・掲載した。 120号（夏号）「新入会員研修」 121号（秋号）「災害看護活動」 122号（新春号）「子育てと仕事のワークライフバランス」 123号（春号）「新人看護職へのインタビュー」 2. 新規入職者に看護職能団体としての看護協会の目的、理念、活動の理解を深めるとともに、キャリア支援、離職防止支援となるよう、新入会員研修を開催した。 5/21～5/24（4 回）受講者 1,120名（会場426名 WEB 694名） <table><tr><td></td><td>5/21</td><td>5/22</td><td>5/23</td><td>5/24</td><td>合計</td></tr><tr><td>会場</td><td>122</td><td>133</td><td>94</td><td>77</td><td>426</td></tr><tr><td>WEB</td><td>173</td><td>322</td><td>142</td><td>57</td><td>694</td></tr><tr><td>計</td><td>295</td><td>455</td><td>236</td><td>134</td><td>1,120</td></tr></table> 3. 会員のニーズに沿える広報活動が行えるよう、会員からの意見を聴取するとともに、協会活動を適切に会員に周知できるよう、工夫し広報活動を行った。 1) 会員の意見を聴取するアンケート調査の実施（令和7年1月15日～2月末） 内容：広報媒体の活用状況、要望、会員確保案等 周知：看護ひょうご、LINE、会館内掲示等 2) 県民向け啓発方法の検討 県民向け健康情報の提供方法 3) 会議や研修会等様々な機会に、協会（活動）に対する意見の聴取		5/21	5/22	5/23	5/24	合計	会場	122	133	94	77	426	WEB	173	322	142	57	694	計	295	455	236	134	1,120
	5/21	5/22	5/23	5/24	合計																				
会場	122	133	94	77	426																				
WEB	173	322	142	57	694																				
計	295	455	236	134	1,120																				

■活動の評価	「看護ひょうご」の企画では、若い世代が関心を持ち読んでもらえるテーマを検討し、会員の参加を得てインタビューや座談会を実施した。能登半島地震被災地への災害支援ナースの活動や、子育てとキャリア継続の両立、次世代の看護を担う新人看護職をテーマに選定し、病院勤務のみでなく、保健所や訪問看護ステーションなど多様な領域の活動を紹介した。会員にとってより親近感が持てる広報紙となるように努めた。 新入会員研修は、オンラインと会場の併用で開催し、会場数は縮小したが参加者は前年よりも増加した。5月実施はちょうど新人にとってストレスが顕著となる時期で、講義でストレスマネジメントを理解するとともに、新人同士で交流を図ることで体験や思いを共有でき、安心感が高まった、よかったという反応が多数であった。 SNSについては、LINEを4月から開設、登録者獲得に向けてPRし、約千人の登録者を得た。メールインフォと合わせ、協会からの迅速な情報提供が可能となり、会員にとっての利便性は高まったと感じる。
■今後の課題	多様な世代の会員で構成される看護協会で、画一的な広報は会員の元に届かないことも予測され、SNS活用の拡大など、多様な媒体を新たに活用する必要がある。LINEを開設したが、さらなる利用者の拡大が必要であり、他の媒体の活用についても検討する必要がある。 また、県民に対しても、健康や医療に関する意識を高めるとともに、看護協会活動や看護職に対する理解を得て期待に応えられる活動が行えるよう、効果的な広報内容や手法を検討していく必要がある。 「看護ひょうご」の次年度の内容について、阪神・淡路大震災から30年の節目を迎えるにあたり経験の伝承をテーマにするほか、多様な領域で活躍する看護職を紹介し、看護の役割拡大や地域での看護職連携につなげていきたい。